

氏名(本籍)	河野良平(兵庫県)		
学位の種類	博士(デザイン学)		
学位記番号	博甲第3634号		
学位授与年月日	平成17年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	芸術学研究科		
学位論文題目	建築家・土浦亀城の住宅作品について その特徴と変遷		
主査	筑波大学教授	工学博士	安藤邦廣
副査	筑波大学教授		鶴沢隆
副査	筑波大学助教授	博士(工学)	花里俊廣
副査	東京工業大学助教授		安田幸一

論文の内容の要旨

本論文は、近代日本の建築を代表する建築家・土浦亀城の住宅作品について、土浦の経歴、住宅観、設計過程を踏まえながら、土浦の住宅作品の特徴とその変遷を明らかにして、それらの作品を、近代から現代に至る日本の住宅の中で新たな位置付けを試みようとするものである。土浦亀城の建築については、これまで土浦の代表作として位置付けられる「第2の自邸」(1935年)についての研究が主に行われてきてはいるが、本論文で対象とした土浦の全住宅作品を取り上げた研究は未だない。そうした点で本論文の意義は、土浦の住宅作品についての新たな資料の提示と共に、全ての住宅作品の特徴を確認して、近代から現代へと続く建築の歴史の中で土浦亀城の住宅作品を再評価し、建築史的な研究へと繋がる新たな知見を得ることにある。

第1章では、本論文の研究の目的、方法、既往研究との関係について論じ、さらには近代から戦後にかけての日本の住宅に関する建築家の関心について概観している。

第2章は、土浦亀城の経歴と住宅作品、およびその他の土浦の作品を含めた設計活動に焦点をあて、土浦亀城の建築家としての活動の概要を明らかにしている。特にその経歴では、土浦の祖先が水戸藩に仕えた藩士で、曾祖父が伊能忠敬の仕事を継承する地図制作者、祖父と父は明治期の新しい教育活動のたずさわりの存在を確認し、大学卒業後の土浦が新しい建築思想を求めてアメリカに渡り、建築家フランク・ロイド・ライトの下で建築的研鑽を積んだこととの関連を指摘している。さらには、土浦の最初の実施作品が住宅であり、事務所開設後も住宅の設計に主要な関心を注いで建築家としての活動を行っていったことを、土浦の作品発表の経緯との関連から確認している。

第3章では、土浦亀城の住宅観についてその言説を主要な資料から検証している。住宅に関する土浦の全ての論考の検証と併せて、住宅設計に関する全ての発言を検討し、その主要な関心が「敷地と平面」、「外観」、「乾式構造」、「設備」に要約されることを指摘している。その中で、土浦の住宅設計の焦点が平面構成では「居間、食堂を中心とした空間配置」にあり、外観では特に「陸屋根」を重要視していたことを確認している。また、特に戦前積極的に試みられた「乾式構造」については、戦時中の資材不足による中断を経て、戦後は積極的に採用されなくなった経緯を確認し、土浦の建築工法に関する関心の変化について検証している。

第4章では、現時点で設計過程を確認できる資料として残された4つの住宅作品について、土浦の設計過程の変遷を詳細に検証している。特にアメリカからの帰国後の最初の作品とされる「山縣邸」(1926年)では、同時代にフランク・ロイド・ライトが設計した「ウィリッツ邸」との比較から、ライトの影響を色濃く残しながらも、さらなる空間構成の単純化の試みが土浦亀城によって行われていたことを確認している。また、その後の土浦亀城の初期の住宅作品を代表する「沢野邸」(1933年)では、設計手法の変遷を微細かつ具体的に検証している。また、当時の土浦の主要な関心であった木造乾式工法で設計された「今村邸」(1934年)や、戦後に設計された鉄筋コンクリート造による「ハザン邸」(1954年)、「土井邸」(1954年)についても、設計過程を確認できる資料を駆使して、土浦の設計過程の変遷を詳細に検証している。

第5章では、土浦亀城の全住宅作品を対象として、第4章で確認された設計手法の特徴とその変遷を前提として、空間構成の方法としての土浦亀城の住宅作品の特徴を確認している。その結果、土浦の住宅作品は、平面について居間を中心に見た場合、1階外部テラスに対して居間と食堂が並列している構成(並列型)と、直接テラスに接しない食堂と居間の構成(直列型)とに大きく分類できた。そうした分析から、土浦の住宅構成の主要な関心が外部テラスと居間、食堂との配置関係として確認できることを指摘している。併せて外観の分析では、戦前においては木造や鉄筋コンクリート造といった構造形式の違いに関わらずほとんど全ての作品が「陸屋根」であったのに対して、戦後には鉄筋コンクリート造の作品にのみ「陸屋根」が用いられていることを確認している。さらには、外壁の仕上に関しても、主に「白色セメントモルタル刷毛引き」から「堅羽目板貼り」へと変化していることを検証している。

第6章では、土浦亀城の設計手法をその住宅作品を手掛かりに分析して、土浦が求めていた住宅の「近代化」を具体的な空間設計の中に確認し、新たなる建築空間の形態への提案と構造、設備との関連から、建築家・土浦亀城が行ったさまざまな実験的住宅空間における「新たなる生活像」を模索する試みが、日本の近代から現代の住宅設計の中で継承されていく経緯の中で、その歴史的意義について言及し、本論文の研究上の位置付けを確認している。

審査の結果の要旨

この論文の意義は、日本の近代建築史の中でこれまで言及されてきた建築家・土浦亀城の業績を、その住宅作品を中心として改めて再評価し、空間設計における土浦の関心の枠組みを詳細かつ緻密に再検証している点で、高く評価された。特に、その設計手法を平面計画のみならず、空間構成の手法や構造、設備、仕上等にわたる詳細な検討が行われている点で、本論文の日本の近代・現代建築史研究としての意欲的な試みが評価された。さらには土浦の膨大な住宅設計に関する資料を新たに収集し、それらを駆使して行われた本論文の研究方法は緻密なだけでなく、新たなる資料的価値の提示としても意義があり、この研究のさらなる展開の可能性が大いに望まれるところである。

本論文では、土浦亀城という日本の近代建築を代表する建築家の住宅作品が主要な研究対象とされたが、建築家・土浦亀城と同時代の他の建築家による住宅作品との比較研究や海外での新建築の潮流との比較など、いくつかの研究上の問題点の指摘があった。しかしながら、それらはこの論文の意義についての疑問の提示以上に、この研究の歴史的、並びに意匠論的な研究の展開の可能性への期待からであったと言えよう。そうした意味では、本研究が、博士の学位請求論文としてのみならず、著者のさらなる研究の展開が、日本ならびに欧米の近代・現代建築史研究に多大な寄与を果すであろうことが大いに期待される場所である。建築の歴史における新しい問題の発掘のみならず、新たな歴史的視点の提示としても極めて意義深い研究として評価された。

よって、著者は博士(デザイン学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。